

はじめに

教務部長の林です。只今から、新入生諸君のために人権問題に関する講演会を開催いたします。花園大学は、1980年に発生した部落差別発言を契機として、従来の解放教育の不十分さを反省し、今なお厳しく存在する差別の実態を認識し、解放教育を本学の教学の支柱の一つに位置づけ、取り組んできました。しかし残念ながら、その後も差別事象は跡を絶たず、本学の解放教育、人権教育の不徹底さは否めないところであります。本日の講演会は、このような意図と反省のもとに企画されたものです。

最初にお断りしたいのですが、本日の講演は、障害児教育について大変造詣の深い社会福祉学部の野村庄吾教授が予定されておりましたが、ご当人の体調が思わしくないために、急遽、文学部の八木晃介教授に変更いたしました。八木教授は長らく毎日新聞で活躍され、人権問題について第一人者であります。3年前に本学に赴任さ

れ、人権関係の講座を担当されております。併せて、本学の人権教育研究室の室長も兼ねておられます。それでは、八木先生、宜しくお願いいたします。

1995年4月10日

花園大学教務部長・社会福祉学部教授

林 信 明

「差別したい気持ち」とは何か

八木 晃介（文学部教授）

みなさんの花園大学へのご入学を祝福し、心から歓迎致します。阪神・淡路大震災の被災者の学生さんも何人かいらっしゃるとは思いますが、その方々には心からお見舞いを申し上げます。地震後、本学からも数百人規模の学生が神戸・阪神間でボランティアとして活躍しました。僕が主宰している人権教育研究室の学生さんたちも主として福祉施設へのボランティアとして頑張ってきました。僕自身は、たった一度だけ、芦屋市から神戸市長田区まで足をのびして、まことに凄まじい地震の爪痕を現認してまいりました。

今、紹介して下さった林教授や親しい同僚や学生には笑われますが、自分ではシティボーイを自認しています。ともかく都会が好きなんです。日本の三都は東京、大阪、京都と言われています。僕は、京都で生まれて京都で育

ち、大学は大阪でした。新聞記者になって最初の十年間は東京、後の十年間は大阪で過ごして、今は京都に住んで京都の大学に勤務しているわけで、日本の三都を万遍なく経験してきたことになります。神戸はこれらと多少雰囲気を変にしている、京都のような山に囲まれた所で生まれ育っている僕からすると、港町・神戸の一種の異質な街の雰囲気が気に入って、新聞記者で大阪にいた頃はしょっちゅう神戸へ出かけていました。ですから今回の地震の後、三宮の駅に降り立った時には、あまりにも変わり果てた三宮の街の様子に思わず涙してしまいました。

しかし、同時に、自分が神戸の街のどこに魅かれていたのかを内省してみても愕然としたわけです。人為的に作り上げられた「港町・神戸」であって、その一種のエキゾチックなムードが単に好きだったに過ぎないのではないかと思います。確かに、地震はどこまでも自然災害であったし、その意味では不可抗力の災害でした。けれども、それによってもたらされた被害のかなりの部分は人災だったんじゃないか。神戸に住まっておられる方や、僕と同様に神戸が好きな方はお気づきでしょうが、この

二、三十年間の神戸のまちづくりの特徴を一口で言うと、「山を削って海を埋め立てた」ことに尽きます。自然破壊の最先端地でもあった。神戸市の行政は別名「株式会社神戸市」と言われているように、企業的な性格の濃い自治体だと思います。営利を目的にした自然破壊というものが今回の地震被害を増幅してしまった、この点については疑う余地がないだろうと思うのです。

そういう動向はなにも神戸市に限ったことではないけれど、そしてまた、日本だけではなく地球レベルで進んでいる動向と言っているのですが、そうした方向に対する自然によるしっぺ返し、甚だ手ひどいしっぺ返しだったとも思われます。こういう認識が今回の地震から得た一つの大きな教訓というものであったし、そのような神戸が好きであった自分はどのような人間であったのかということも、僕自身考え直さなければならなかったのです。

地震の後、20万人以上の避難所生活者、つまり難民が発生した。そして人間の生存権の原則部分である衣食住の権利が根底的に奪われた。その他、避難所生活ではプライバシーが侵害されることも日常的に見られた。そし

て神戸市は、同じような都市づくりの発展過程を通過してきた横浜市と比べてみても、福祉行政の水準はかなり低いのです。そういうことも今回の地震によって一層はつきり認識できるようになりました。自然を享受する権利、普通に生活する権利、もっとも根本的な生存権、プライバシー等々の基本的な人権の侵害状況を単に「自然災害だからやむ得えない」という形で言い逃れするのは認めがたいと思うのです。

●「危機管理」「治安管理」と人権●

地震の後、「危機管理」という言葉が政・財・官界、マスメディアの世界においても氾濫しました。危機管理と言われている言葉の中身はいろいろありますが、結局のところ、自衛隊と警察力を増強することです。実際、確かに、地震の後、自衛隊や警察が非常に活動し、それらに評価すべき点が多々あったのは事実だとしても、自衛隊は本来、軍事的な戦闘集団ですし、警察は治安維持のための警備集団であって、住民や市民の救助・救援組織ではないのです。事実、震災直後、被災した人たちの

話によると、「一番頼りにしたのは消防レスキュー隊であった」と。これはまさに救援、救助組織であるわけだから当然の反応でしょう。震災、災害対策としては自衛隊や警察の強化ではなくて、消防レスキュー隊の充実こそが望ましい。まして自衛隊は憲法九条との関係で、まだまだ問題点は多々あるし、基本的には違憲の存在ではないかという疑問もクリアには解決されていないのです。

一方、サリン事件や警察庁長官狙撃事件、それを引き金にして「日本の安全神話が崩れた」ということで「治安管理」がかなり声高に叫ばれるようになっていきます。治安管理は今ある社会を最善のものともみなして、それを守るために警察とか自衛隊を強化するところに本質があるように思います。もし、治安管理というものが徹底的に行われていけば、日本の戦前の社会状況と重なってくるだろう。その時代、あらゆる批判は国家に対する反逆だとみなされたわけです。もちろん、そこには人権などというものは存在しないと考えられ、否、それどころではなく、人権概念も存在しないし、人権という言葉を使うだけでも罰せられた。

一体、この間のサリン事件をめぐる動向から何が判明

してきたのか。今日(95年4月10日)の時点では、実は何もはっきりしていません。サリンとオウム真理教との間に、どういう関係があるのか。状況証拠的には何事かが浮かび上がってきていそうですが、確たるものは今のところ何も出されていない。仮にオウム真理教がサリン事件を引き起こしたとして、それならば今の警察のやり方を認めることができるかどうかということは、しかし、別問題です。これまでにオウム真理教の人たちが約70人くらい逮捕されています。しかし、ただの一人もサリン事件の直接的な容疑によっては逮捕されていない。全員別件逮捕です。別件逮捕というものが合法的なのか、違法なのかについてはなお法律的にも決着がついていませんけれど、しかし、少なくともめざすべき本件、サリン事件についての確たる証拠がないので別件で身柄を捕って、そして本件に迫っていくというやり方が捜査の常道でないことは確かです。もちろん、法曹界においては別件逮捕が違法だという意見もかなり強いことは知っておいて下さい。

みなさんが学外オリエンテーションに出かけられた4月7日、こんなことがありました。兵庫県西宮市でオウ

ム真理教の信者が「この間の警察のやり方は不当弾圧だ」という趣旨のビラを通行人に撒いていた。それをもって警察は道路交通法違反だと決めつけ、その人を検挙し、それを口実に西宮市内のオウム真理教の施設を家宅捜索しました。しかし、考えてもみて下さい。ビラ撒きというのは基本的人権中の基本的人権に属する行動です。言論表現の自由を正当に表明するに有効な方法であり、我々が捨てることのできない表現の方法なのであります。そういうふうを考えていくと、ビラを撒いたから道交法違反だと、それだから家宅捜索を徹底的にやってもいいというやり方は明らかに行き過ぎです。仮にオウム真理教がサリン事件の真犯人だということであったとしても、この点は認められません。まさに信者が撒いたビラのように「不当弾圧だ」と言われても仕方がないことを警察がやっているということです。

しかし、この間のマスメディアを通じて、サリン事件はどうやらオウム真理教の仕業らしいという世論がほぼでき上がっていますので、この間の警察の捜査の方法については、多くの人々がそれを不当だと考えていない。人々にそう思わせない状況ができあがりつつあるという

ことです。つまり、「危機管理」とか「治安管理」という言葉によって示される状況とは、先に述べたように、あらゆる批判的な思想や意見、態度が認められなくなる状況であるわけです。人々がすべての批判的なものの見方、考え方を放棄させられる、しかも放棄させられているという自覚をも放棄させられるのです。その結果、無批判のイエスマン、イエスマンばかりが大量に作り上げられていく、そういう状況の総体を意味します。

僕が今、自身やサリン事件を持ち出して言いたかったことは何か。もちろん、今僕が述べたことにみなさんが全面的に賛同する必要はないんですが、しかし、少なくとも、日常生起するすべての問題に対してクリティカルな視点、すなわち批判的な目を持って接することが必要だと言いたかったのです。みなさんが大学にこられた目的は何か？ むろん多様な要因、動機があるだろうと思います。しかし、やはり勉強することが第一義的な目的でなければほとんど意味がないだろうと思うのです。もちろん、大学に来なくても勉強はどこでもできます。しかし、大学に来た限りは、勉強することが最も大事だろうと思うんです。問題は、勉強するとか学問するとか

の中身は何なのかという点にあります。それも内容的には多様ですけれども、重要なことは、批判的な力量を育て上げていくことだと考えます。世の中で「当然のこと」とか、「あたりまえ」とか、「常識」とか、「自明の理」とかされていることのすべてに、まず本当だろうかと疑問を呈して、その疑問を解き明かすためにいろいろな方法論を駆使して学習することが、多分勉強することの本質だろうと思うのです。

●クリティカルな思考こそ●

みなさんは高校時代まで、わかっていることを問われてきたと思います。すでに解かれている問題を問われ、その解にどこまで近づいた解答を答えるかによって評価されてきた。そういうやり方を勉強と呼び、そのことに慣れ親しんできたはずです。そうではなくて、わからないことがもっとも重要であって、わからないことをどうすればわかることができるのかという方法を会得することが、これからの勉強なのです。わからないことを学習する。そのために、いわば問題発見能力を高めていくこ

とが大事だろうと思うんです。こういうものの考え方を本学の人権教育の場面においても、我々は追求しているつもりです。

ご存じのように、この大学は臨済宗妙心寺派を基礎にして作り上げている臨済禅の大学です。同時に、反差別と人権拡張の課題を教育と研究の大事な柱の一本に据えているわけです。臨済禅について僕は素人ですから深入りできませんが、禅のキーワードの一つに「己事究明」という言葉があります。己のことを究めて明かす、自分自身を徹底的に解明していくということです。その意味で、己事究明という個別的な真理の求め方として禅があるのだろうと僕は理解しています。一方、人権は、どちらかといえば普遍的な真理に属する概念です。この二つの真理の求め方をどうやってつなぎ合わせて把握することができるのか。屁理屈のように聞こえるかも知れませんが、重要なところです。

己事究明という場合、自分自身という言葉を用いるからといって、それは孤立無縁のたった一人の、誰ともかかわりをもたない自己を意味するわけではありません。そのような人間はどこにも存在しない。かけがえのない

自分自身もまた明らかに社会的な存在です。我々は社会からも影響を受けるけれども、社会に対しても能動的に影響を与えることができる。そのような社会の中で、他者との相互作用を通じて自分自身というものを作り上げていくはずです。そのように考えていくと、結局のところ、己事究明という個別的な真理と人権という普遍的な真理を結合する時に、何がもっとも研究課題として重要になってくるかということが問われてくるわけで、人々が社会関係、人間関係を営む時に両者を媒介するものとして人権という課題が浮上してくるわけです。

ところで、この中に、関西から西の方で、小、中、高時代を過ごしてきた人がたくさんいるだろうと思います。ですから、多くのおみなさんもそれなりに「同和」教育という形で人権学習を体験してきたはずですが、それを体験してきた人たちが、自分が経験してきた人権学習をどういうふうに評価しているのかということが一つ問題としてあります。

我々の人権教育研究室では、一昨年と昨年の2回、新入生全員を対象に人権意識調査を実施しました。この結果はすでに2冊の報告書にまとまっていますので、もし、

読みたいと思われる方があれば、いつでも人権教育研究室にお出でいただければ差し上げます。ただし、今年には実施しません。来年度、一回目に実施した1回生が4回生になった段階で、もう一度調査をやります。本学に在学した四年近くの間、本学の学生の人権感覚がよくなったのか、よくならなかったのか、全然変わらないのか、時系列的な変化も含めて、我々自身の教育課題、研究課題を深めることも合わせて、この大学の全体としての人権教育の水準を上げていこうというのが目的です。

過去2年間の調査結果を見ますと、大学に入ったばかりの学生たちが、自分の受けた人権教育をどう評価しているかを大雑把に見ますと、肯定的に評価している人が六割、逆に否定的に評価している人が四割になっていました。肯定的な回答を寄せている人の中でも内容的にはいろいろで、まさにタテマエとして答えておいた方がよさそうだという部分も他の設問とのクロスから出てくるので、本当は過去に受けた「同和」教育、人権教育に対する全体的な評価はかなり低いと見なさざるを得ませんでした。それはみなさんも、過去に受けたそれを今反芻してみれば、パッとしなかったという印象を持っておら

れる人が多いんじゃないかと思うんですね。

こういう否定的な評価をする人たちについて、自由回答も一部とったのですが、それを見てみると、なるほどなど、ある程度、納得しないではいられませんでした。人権問題に対する自分自身の消極的な姿勢を、過去の教育を批判することによって合理化し、正当化する傾向がなかったとは言えませんが、しかし、全体としては、かなり誠実に過去を振り返り、しかし、どう考えてもさほど評価できる教育内容が準備されていたとは思えないと反応していた人が多かったように思われるのです。

このような結果は、僕も参加している日本解放社会学会で行ってきた調査の結果とほとんど一致しています。一言で言うと、人権教育が行われている教室のムードは非常にじめじめとしていて、暗くて、面白くもおかしくも何ともないという雰囲気です。教員にしたところで、人権教育を割り当てられたからしょうがないから、いやいや、しかし大過なくやり終えようとする姿勢がミエミエです。しかも、部落問題について言えば、運動の流れだって必ずしも一種類ではなくて、しかも、対立的な流れがある。いずれかの立場に立ってものを言えば、他の

側から痛烈な批判を浴びてしまう。これはヤバイことだから君子危うきに近寄らずということで、どこからも批判がこないような、どちらにもお安く願うような論点の組み立て方になるわけです。どこからも批判が出ず、どちらにもお安く願うような議論が誰かに対して衝撃力を持って迫ってくることはあり得ません。政治的な流れを慮るがゆえに、何ともインパクトのない話に終始してしまうという次第ですね。

問題は、あくまでもタテマエとして語られ、決して自分のホンネとして語られることがない。さらに、問題を自分のこととして語るのではなくて、あくまでも他人ごととして客観的な風を装って展開する。しかも、さも深刻そうに体まで強張らせて授業を展開していくわけです。こんな教育が面白いわけもない。口では解放という言葉を使いながら、その言葉を使っている人自身が全然解き放たれていないのです。反差別の課題をおもしろおかしく楽しくホンネでもって、さらに自分ごととして考えていこうじゃないかというふうには、とりあえず我々は考え、この大学での教育も研究もその方針でいこうと考えています。もちろん完全にうまく行っているとはまだいまえ

せんけれども、志としてはそうなっています。

僕は、当面、新入生のみなさんとは教養課程の一科目と教職課程の一科目でしかお目にかりませんけれども、そこで一度、僕が今述べたようなことが、全面的に展開されているか否かはともかく、少なくとも志として志されているかどうかを点検してみてください。我々の人権教育研究室では、いろんなことを考えてやっています。今、専任教員が13人、職員が2人、非常勤講師が2人、事務助手が1人。この体制で研究室を運営しているんですが、年一回、論文集を出したり、市販に乗せる本を出版したり、意識調査をしたりしています。年四回の研究会も開きます。五月に今年度の第一回目の研究会がありますので、みなさんにもぜひ覗きにきてほしいと思います。

その中で、我々は既成の価値観に拘泥しない自由な発想法を保とうということをモットーにしています。パラダイムの変換、我々はそれをめざしています。パラダイムとは、問題の立て方と、それに対する解の与え方の全体を意味するのですが、部落問題、差別問題全体のパラダイムの変換を目指してやっっていこうということです。そのために研究員はお互いに頭は叩き合うけれども、足

は引っ張り合わない、そして思想的には厳しく人間的には優しく、をモットーに研究を進めています。さらにこの研究室には、学生委員会がありまして、各学部学科の有志の学生たちが人権教育研究室学生委員会を構成しています。12月に花園大学は独自に人権週間に取り組みます。学生たちはそれにも主体的にかかわっています。入学式の時にお渡した『人権教育研究室報』の企画、取材、編集作業も学生たちがほとんどを担いきりました。そういう形の活動もしています。人権教育研究室は栽松館の4階にあります。普通は助手が一人います。誰でも出入り自由です。土曜日は閉まっていますが、それ以外は朝10時から6時頃まで開いていますから、是非覗いてみて下さい。非常に面白い先輩たちに出会えるはずです。

●関係の組み直しを求めて●

僕は、フィールドワークをかなり重視します。野外実習です。年齢的に見てもあたりまえですが、みなさんの社会性がまだまだ限定されていて、それをもっと押し広げていく必要があると学生自身も考え、僕も考えるから

です。いろんなフィールドに出て、多様な人たちと出会い、多様な会話を交わし、人間同士の相互作用を深めることによって、学生自身の人間関係それ自体が新しく組み換えられていくのです。

みなさんはオギャアと生まれて以来、現在の年齢になるまでの間に、すでに存在している文化とか価値観とかを身につけて現在の自分自身を作り上げているはずですよ。そういうすでにある文化や価値観を身につけていくプロセスを「社会化」というふうに社会学では呼びますがけれども、その社会化のプロセスの中で、好むと好まざるとにかかわらず誰もが一定の差別性を身につけてきているはずなんですね。なぜなら、我々を社会化する社会が差別的な編成原理のもとに成り立っているからです。そういうことも現にある問題において差別されている人たちとの人間関係を作り上げていくことによって、点検を迫られるはずですよ。一回や二回やっても意味は少ないのかもしれないけれど、そういうことを積み立てていく中で、いわば、「社会化のやり直し」ということが迫られてくるはずですよ。全くものに感じない、人に感動しない人というのも絶対いないわけではないので、こういう人たち

は例外ですけれども、多くの人たちは、そういう経験の中で自分自身を変えていくことができるのです。

毎年、冬になると、僕の何かの授業で、「夜まわり」を実施します。夜まわりというのは、京都市内で野宿している人、余儀なく野宿させられている失業中の日雇い労働者への一定の救援、支援を含めた実態調査です。すでに夜まわりを続けている京都のキリスト者たちの集まりがあって、彼らの指導の下に我々も合流していく形を取りますけれども、真冬の六週間、深夜にこれを授業として展開するのです。みなさんも街を歩いていて、街角とか鴨川の橋の下とか円山公園でダンボールを被って寝っ転がっている人を見たことがあると思います。そういう人たちを見ている自分自身のまなざしの質を考えてみたことがあるでしょうか。ただ単にそこに物体が転がっていると見ている自分自身ではなかったかどうか。

実際、夜まわりをやってみて、最初はオズオズと、その人たちと何を話していいかわからないというレベルから出発します。どこから話を切り出していいかわからないけれど、とにかく一定の交信を繰り返していく中で多少の関係ができあがってきて、いくばくかのコミュニケー

ションを成立させていくことによって、今までは自分たちが彼らを見ていただけで、彼らによって自分自身も見られていたのだということに気づかなかったことに、その時、思っていたはずなんです。我々も見られていたのだ、ということです。まなざしは一方向性ではなくて双方向性であったんだということに気がつくはずです。

差別というのは、おそらく、見ている自分だけを自覚し、見られている自分を自覚しない状況下で起こることだと、これはある心理学者の言ですが、まことにそのとおりです。フィールドワークは一つの方法でしかないんですが、我々のこれまでの人間関係のありようそのものについての考え方というものを考え直す一つの取り組みです。

以上述べたことは、すべて疑ってかかるという、勉強の仕方の基礎的なあり方についての提言です。今までみなさんは、学校教育の中で、「差別してはいけません」とか、「人権は守られるべきである」というふうに耳タコになるような言われ方をしてきたと思います。そんなことは言われるまでもなく自明だと、みなさんは先刻承知のはずであり、それを大学まできてまたやるのかと思

われるかもしれませんが、それはやりません、絶対にやりませんよ。

「べきである」とか、「ねばならぬ」とかは、解放とはレベルが全然違うんです。ねばならぬとか、べきであるという世界から飛び出して、したいからするという世界に行こうじゃないかと僕は提案したいのです。大学へ来たばかりの学生さんたちと話してわかるのは、人を差別して貶めることを当然だと言う人は滅多にいません。九九%の確率で、差別はいけないことだと思っている。そう思っているが、それならば、差別と闘うために自分自身が何か具体的に行動しているかどうかを内省した時に、多くの人は何もしていない自分自身を発見しないではいられない。頭の中では反差別だと考えていても、それが行動に具体化しなければ、あまり意味がないということは考えるまでもなく明らかです。だから何もしていない自分自身に対して、誠実な学生であればあるほど、後ろめたさ、やましさを感じるわけです、自分は偽善者じゃないかと。差別はよくないと言いながら、よくない差別をどうにかするために何かやっているかといえば、何もやっていない自分というのは偽善者じゃないかと葛

藤するのですね。葛藤している人の表情が暗いのは当然です。我々としては、暗い葛藤した表情をすっきり明るい表情に変えてもらいたい。教育内容も、そのために組み換えていきたいと思います。

人権問題だけに限定しませんが、既成の常識から抜け出して新しく正しい認識に到達してほしい。僕らもそうしたいと思うのです。たとえば、部落問題については、いつできたか、どうしてできたかという問題について、教科書的には近世江戸時代、幕藩権力の下で、政治的に身分が固定された、それが出発点だったということになっています。大枠としてはそうした近世政治起源説で正しいのだが、もう少し細かく見ていくと、必ずしもその認識だけで十分だとは言えなくなっているだろうと思うのです。教科書的な事実だけで、もういいと言ったら、我々の知性を開発することは、そこで終わりになってしまうと思います。

このことは、人権教育の目的構造についても言えます。僕としては、もはや、差別をなくそうという獲得目標を立てないことにしています。むしろ差別というのは、人間関係のありようを基本的に特徴づけている一つの要因

じゃないかとさえ思われるのです。だから、「差別というのはとても必要ですよ、がんばって差別しましょう」というわけではなくて、全く逆です。差別をなくすという目標を一挙的に立てるのではなくて、差別は現実に存在し、そして我々はほおっておけば、差別してしまう傾向性を持っているんだということを、まずは寂しくとも認めて、そこから、じゃあどういふふうに具体的にこの問題にかかわり、闘って、その闘いに勝利していくか、このところの展開こそが重要だと思うのです。

●人権教育の見直し●

差別というのは人間にとってかなり本質的なものだという言い方は、かつては「差別本性論」として、つまり差別的なイデオロギーとして部落解放運動によって批判にさらされたものです。今でも多分そうだろうと思いますが、僕はおめずおくせず、そこを認めるところからしか出発できないだろうと考えています。差別はなくなかないかもしれないけれども、しかし、現に差別がある以上は、身近なところから一つひとつきちんと向き合っ

闘い抜くことが重要なのです。今言ったような方法を日常生活世界に当てはめることができれば、僕たちは今日から、今からでも、たった一人でも反差別の取り組みに着手することができるわけです。そういうふうに発想法を切り換えることをお勧めします。

従来の理論でいくと、人間は生まれた時には真っ白だとされてきました。それが成長の過程でいろいろ色付されて今ある自分が形成されると言われています。本当に人間は真っ白な状態で生み出されてくるのでしょうか。どうもそうではなさそうなんですね。ある生物学者の言によれば、生まれながらに10の14乗ビットの情報が、生まれた赤ん坊の脳内には組み込まれているのだそうです。そしてその後の社会化のプロセスの中で、それを上回る10の19乗ビット分の情報が付け加えられていくらしい。だから、現在の自分は生まれたままの自分自身ではあり得ないのだけれど、しかし、生まれた時には何もなかった、その後の成長過程で全面的に作り上げられてきたとも言えないようなのです。もちろん、あらかじめ組み込まれている10の14乗ビット分の情報の中に差別性が入っているかどうかは実証不可能ですからわかりませんけれ

ども。ただし、差別的な傾向性を我々が持っている可能性を示唆しているとは言えるでしょう。そして、それを放置しておくのではなく、差別性を反差別性に転化していく人間的な営為こそが不可欠なのです。差別をなくすという、どうも成功しそうにない獲得目標を立てるのではなくて、その代わりに差別と闘うという獲得目標に切り換えるということです。解放というのは、どこかにある達成された状態ではなくて、その状態を達成するために、いろいろとがんばっていくプロセス、過程そのものなんだと考えてはどうでしょうか。遠い将来への関心ではなくて、具体的な自分の「いま、ここ」、それをこそ問題にすべきではないかという発想法です。

それから一体、解放されるのは誰なのか。これまでの人権教育の中で強調されたのは、しばしば「気の毒なあの人たちの解放」だったんです。「気の毒なあの人たち」の解放に対して、我々はどのくらいの力を提供することができるかという発想法が強かったと思います。その人たちを「気の毒なあの人たち」と考える発想法自体が問題なのだと僕なんかは考えるんですね。そうじゃなくて、「あの人たちを差別しないではいられない哀れな自分自

身」をどう解放していくのか、それが肝心要の課題です。まさに自分自身の解放こそが解放なんだ。自分自身を自由に解き放つことがないまま、差別されている他者のことを考えるというのは、むしろ確かにそれは重要なことではあるけれど、しかし、自分をほおっておくという点ではあまりに僭越ではないかと僕は言いたいのです。

そうするために、我々は「いま、ここ」で、どういう不自由な状態、解放されていない状態を経験しているのかということ、一人ひとり、自分に則して解明していく以外にないだろうと考えます。あなたたちが何によっても呪縛されてない、縛りつけられていない、完全に自由だと思っているならば、ご同慶の至りというか、よほどおめでたいというしかないんですけども、そういう居直り方をしてはいけません。自分自身が今不自由にさせられている主要な要因は何なんだろうか、お金の問題か、これまで散々苦しめられてきた受験なんかで代表されるあの競争主義や能力主義なのか。ここの大学に来たことを勝利だと位置づけている人もあれば、どうしようもなく、ここしかこれなかったと敗北的に位置づけている人もいるだろうと思うんです。そういう総括の仕方

は自分自身にとってどういう意味を持っているのか、誰の価値観に合わせてそういう評価を自分がしているのかを考えてほしいと思うのです。今すぐとは言いませんが、やがて自分だけの価値観、自分だけの尺度というものを作り上げるべく勉強してほしいわけです。

さらに反差別の課題を考えると、しばしば民主主義のジレンマにぶち当たると思うんです。それというのも、現在の民主主義は結局のところ、多数決主義に解消されてしまうからです。多数決主義は多数派が勝利することになっているわけで、必然的に少数派は切り捨てられ無視されることになります。そうすると、多数決主義としての民主主義を純化すればするほど、差別は確実に強化されることになるわけです。これはまさに矛盾です。民主主義がもっともいいシステムかどうかは別として、人類が経験したこれまでの歴史においてベター、否、ベストに近いシステムであることは間違いないんだけど、しかし、多数決主義に解消されるところに問題があるという問題のとらえ方がやはり必要です。でなければ、少数者、マイノリティは切り捨てられざるを得ない。一方では民主主義は「皆同じ」というスローガンになってい

る。一体、皆同じというのは平等主義を標榜しているかどうか。むしろ、僕としては、皆同じというものは言葉の真の意味での平等とか解放とかを保障するものではないと考えます。むしろ「皆、違う」と考えたいのです。しかも、やむを得ず「違いを認める」のではなくて、「違い」そのものを目一杯うんと高く評価するという、そのような我々独自の価値観、文化性を獲得していきたいと思います。異端を尊重するという文化を身につけよう、というわけです。

●「差別したい」気持ちとは●

最後に、我々自身の「差別したい気持ち」について考えます。差別したくなるには、さまざまな理由があるだろうと思います。みなさんも僕も、胸に手を当てれば、かつて何人の人たちに差別的な思いを抱き、具体的に差別的な行動によってそれを示してきたかということに思い当たるはずです。本学では、昨年7月の夏休み前に連続差別落書き事件が発生しました。非常に残念なんですけれども、しかし、世の中は差別的にセットされている

わけですから、差別事件が起きるのもある意味では必然
といえると思います、肯定することはできませんが。

当然のことながら、この問題について全学をあげて取
り組みました。むしろ学生の方が教職員よりも熱心に差
別落書きを書いた人に対して抗議し、自己批判を求めて
ビラを配ったり、タテ看を立てたり、集会を持ったりし
ました。事件それ自体は非常に残念な出来事だったけれ
ども、しかし、それを起点に全学の反差別のエネルギー
が噴出したことは評価されてしかるべきです。事件は一
応止まっていますけれども、内容全体の説明はまだでき
ておらず、今はある意味ではペンディングになった状態
になっています。差別落書きの実行者は、みなさんの目
があるところで公然と落書きをするわけではなく、多分
一人きりで薄暗い気分の中でシコシコと書いているんだ
ろうと思います。もちろん許容できない落書きではありますが、それにしても落書きをした人には落書きをせざるを得ない主観世界の事情があったと思うのです。本人にとってのやむを得ない事情ですね。このことを無視して、単にケシカランというだけではだめなんだと思います。だから、僕も参加している人権教育研究委員会の声

明の中で、落書きせざるを得なくなった気持ちを、落書きという卑劣な表現方法ではない別の方法で是非とも全学の構成員の前に表出してほしい、一体、何が自分をして落書きさせたのか、その要因を自分で分析して出さない、という呼びかけをしました。残念ながら名乗っては来ませんでしたけれど。社会的に心理的に、さまざまな苦境に陥った時に、人を貶める差別という方法をとる前に、どうか自分自身の苦悩を客観化していく作風を手に入れてほしいと思うのです。

一人ひとりには個別の悩みが必ずあるはずですが、それは個別の苦悩であると同時に、必ず社会的な苦悩の反映でもあるはずですが、他人によって了解されないようなものではないと思うのです。我々は、それを知りたいと思っているわけです。少なくとも僕は知りたいと思います。他者に対する恨みつらみがあって、そのためやむにやまれず、他にやり場のない怨念を他者に移譲する形で差別事件を引き起こしたという事例もあります。

何か利害関係が身近に迫ってきたことに気づいた時、自らの利益を守るために他者を差別するやり方もあります。三年前の卒業生で社会福祉学科の女子学生の事例で

すが、被差別部落の学生をボーイフレンドとしてもちました。そんな段階で、別に親になんか言う必要がないのに、彼女は父親に「私、ボーイフレンドができた。その人は実は被差別部落の人で、同じ花大の学生だ」と告げた。なぜ彼女が父親に言ったかという、彼女の父親は兵庫県の教員をやってまして、兵庫県では少し名前を知られた同和教育の実践家だった。そんなわけで、彼女は自分の父親を信じて話を持ちかけたのです。しかし、父親の反応は彼女の予測とは逆で、「今なら間に合うから、その付き合いをすぐやめろ」というわけです。まだ恋人にもなっていない、今だったら、結婚問題にならないですむので、やめろというわけです。彼女は失望落胆しました。それで僕のところに話をしに来たのです。僕も父親なる人に関心があったし、どうしても変わってもらわないと困るわけで、何回か接触を取ろうとしたのですが、結局会えずじまいでした。

彼女は卒業するまでの一年あまりの間、父を説得し、変わってもらおうとアタックしました。どんなに差別的であっても、やはり自分の親ですから、親をこのまま差別者のままにしておくのは娘として忍びない、何とか父

親を真人間にしたいと頑張ったんですが、この父親は頑迷固陋で微塵も変わろうとはしなかったそうです。それで卒業の時に、娘は親を捨てました。ある意味では不幸だけれども、やむ得ないと思います。この父親は、被差別部落の出身者と娘とが結婚するようなことになったら、どんな不利益が自分に來るだろうかという、ほとんどあり得ぬことを先に予測して、予定調和的に自分自身を差別者になり下げてしまったというわけです。そういう形で利害関係が実際にあるがなかりながら、ありそうだと感知するだけでも、人は十分差別者になれるんです。

今の若い人たちだけに限りませんが、日本人によく見られるのは、体制に同調してしまうという傾向性です。体制につき従っている限り安全だというわけです。一人目立ったりするのはマズイという同調志向が強い。世の中の体制が反差別と人権拡張の原理で成り立っていれば、その体制に同調していれば、大過なくいけるわけですが、この社会は原理的に差別的に編成されています。そういう体制に無批判に同調し、イエスマン、イエスウーマンとして自分の行動を決めてしまえば、これは確実に差別的になるはずですが、みなさんも想像してほしいんですが、

友だち同士で飯を食いに行った時、友だちの誰かがひどく差別的な発言をしたとしましょう。その時、大抵の人は、「これはよくない差別発言だ」と思うと思うんだけど、そう思った時にどうするか。学生同士ですから大した利害関係が絡むわけでもありません。だから、「お前さんの発言は差別的でマズイ。反省なさい」ときちっと指摘しても何もしっぺ返しもないんですが、本当にそのように言い切れるかどうか、その時に。まして就職でもして、上司と飲み屋に行って、酒を呑んでいる時に、直属の上司が差別的なことを言った場合、この時には、かなり利害関係を意識しますから、注意するのにかなり躊躇するだろうと思います。

躊躇していいですよ、というのではなくて、僕はそこでおめぞおくせず注意すべきだと思いますけれども、果たしてどこまできちんと言えるかどうか。そういう局面に遭遇した時の自分を想定して、自分だったらどうするだろうかを考えてほしいのです。問題の所在に気づかなければ仕方ありませんが、気づいていながらそれを是正するための具体的なアクションに出られない自分自身の情けなさ、弱さをとらえることができれば、まず第一

歩です。多くの場合は居直ってしまって、「いちいちメ
クジラ立てておかしいと言っているのは、いつまでたっ
ても大人になりきれず尻が青い証拠だ」という理解で終
わってしまったら、これはお終いです。こんなふう
に、体制につき従ってしまいがちな自分、流行に左右されが
ちな自分、そういう中で十分、人は差別的になります。

以上、簡単に述べたように、他者に対する恨みつらみ、
利害関係が現実にある場合、現実になくてもありそうだ
と想定した場合、さらには無原則に人に同調している場
合等々、人はいくらでも差別的になり得るのです。そう
いう局面で、我々は差別したくなるのです。差別したく
なっちゃいけないと口を酸っぱくして言ってみても、そ
ういうふうになりがちな自分であるということを、まず
自覚する必要があるし、ならばそういう自分を、どの程
度まで、どのように変えていけるのか、そこに賭けよう
じゃないかというふうに、僕はみなさんに呼びかけたい
のです。

個人的な悩みは、必ず社会的です。逆も真で社会的な
悩みは個人的な悩みを増幅させます。だから社会は個人
の悩みに関心ではられないですし、個人は社会の悩

みに無関心ではられない。もちろん、僕も無関心では
られません。みなさんとは、たまたま縁あって同じ花
園大学で最低4年間つきあっていくことになります。大
概のことには相談に応じます。差別落書きを書く前に、
是非とも、僕の部屋に来て下さい。僕は、あなたの悩み
に最後までつき合いたいと思っています。